

説教 『冒険に注がれる恵み』 山本 護 牧師
聖書 創世記 3:1~7 / ローマの信徒への手紙 5:12~16

「主なる神は人に命じて言われた。[園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう](創世 2:16~17)」。なぜ神はわざわざ「善悪の知識の木」を植え、食べてはいかんとしたのか。その内容は実感としてそのまま分かる。父母のような神が「食べるな」と命ずるものだから、かえってその果実を食べたくなくなっちゃうのだ(3:6a)。

背信と表裏一体である冒険心。これは人間たるゆえんだ。哲学や御伽話よりもいつそう古く、人間の深みを垣間見させる神話。あるキリスト者たちは、こうした創世記の神話を逐語霊感的に「歴史の出来事」だと言い張るが、神話は史実のような浅い物語ではない。また神への忠実度を試すような、つまらない宗教道徳でもない。神話とは、私たち人間存在の始源に迫る巨大な問いである。

女は蛇に唆されて禁止果実を食べ、それを男にも食べさせた(3:6)。女は唆しに抵抗するが(3:3)、「目が開けて善悪を知る(3:5)」誘惑が勝っていた。善悪を知るといふ誘惑は、強い力であった。目が開け、彼らは自我を得、己を客観視する(3:7)。蛇は「決して死ぬことはない(3:4)」と言ったが、なるほど即座に死にはしなかった。しかし神の警告通り人は、寿命が尽きたなら死ぬ存在となった(2:17)。

「アダムからモーセの間にも、アダムの違反と同じような罪を犯さなかった人の上にさえ、死は支配した(ロマ 5:14)」。つまり「律法が与えられる前にも罪は世にあり(5:13)」、その証拠が死なのだ。律法は罪を判定する基準であり、それはモーセから始まり(出エジプト 20:3~17)、次第に拡大していく。

人間の衝動が理性よりも深い層から起こるように、罪の発出点は律法で捉えられる層よりも深い。要するに罪の本性は、一部分の墮落などではなく、人間が生きている事それ自体に否応なく伴っている何か、なのだ。確かに罪は、律法で判定されうるが、罪の本性は判定されたその場にはない。時に人は「自分は罪深い」と嘆き苦しむが、ただそれは律法や世俗道徳の水準でのこと。パウロが捉まえているのは、死とほとんど同義語の、どうしようもなく深い罪。「一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだ。すべての人が罪を犯したから(ロマ 5:12)」。

「しかし、恵みの賜物は罪とは比較にならない(5:15a)」。禁止果実を食べ、やがて死すべきこの私に「一人の人イエス・キリストの恵みの賜物は、豊かに注がれる(5:15)」のだと。背いて禁止果実を食べ、冒険をしている私たち一人ひとりに、「なおさら＝さらにいっそう」神の恵みが注がれる(5:15)のだと。信仰深い敬虔な人たちの死と相殺される程度の恵みではない。キリストの救いに限界はない。「恵みが働くときには、いかに多くの罪があっても、無罪の判決がくだされる(5:16)」のだから。

こうしてひと巡りすると神話の印象が変わるだろう。禁止果実を食べ「目が開け、自分たちが裸であることを知った(創世 3:4)」二人はもはや無垢な自然ではない。自然の女は、アダムによってエバ(命)と名付けられた(3:20)。また生命体のアダム(2:7)も、エバによってアダムという人格を得た(3:6)。これは墮落物語ではなく、人間の冒険譚だ。キリストの恵みは、そんな冒険に注がれている(ロマ 5:15)。



【おまけのひとこと】

下品な言葉とふるまいを禁止されるほど過剰になる子供たち 人は何に従い 何に背くのか
どこまでが悪戯で どこからが罪悪なのか いずれにせよ 痛みと共に悔い改める所で 恵みに出会う